

児童文学における地理空間

—『小人の冒険』シリーズを事例に—

劉 暁 一

(2024年10月9日受理)

Geographic Space in Children's Literature
— A case study of the "The borrowers" series —

Xiaoyi Liu

Abstract: Since children's literature is intended for children, the emphasis is on providing a space where children can easily imagine. For this reason, authors often create the world in their works using their immediate environment as a model. The setting of a story often reflects the author's cultural background and living environment. Studying this will help to elucidate the cultural and social context in which the work is based. The aim of this study is to clarify the geospatial configurations related to the settings in each story of the "The borrowers" series. The relationship between the geographic spaces in "The borrowers" series and the real-life model locations is examined, along with the author Mary Norton's impressions of her childhood home, or her landscape of the heart. The geospatial context of the stories was found to be related to her original landscape.

Key words: children's literature, literary geography, original landscape, humanistic geography
キーワード：児童文学, 文学地理学, 原風景, 人文主義地理学

1 はじめに

文学作品において、地理空間の描写は物語の魅力を高める重要な要素の一つである。特に児童文学では、物語の舞台となる地理空間は、読者の想像力を刺激し、物語の世界に引き込むための効果的な手段となる。子供たちの心に鮮やかなイメージを与えることで、物語の展開をより生き生きと感じさせるのである。また、地理空間は物語のリアリティを高めるためにも重要である。詳細な地理的描写は、読者に対して物語の世界が現実存在するかのような感覚を与える。これにより、物語への没入感が深まり、読者はキャラクターと共に旅をしているような気持ちになる。

このように、児童文学における地理空間の描写は、

本論文は、査読付き論文である。

物語の魅力を引き出し、読者の心に深く訴える力を持っている。地理空間の重要性とその多様な役割を考察することは、児童文学の理解を深める上で非常に有益である。

児童文学における地理空間の描写は、物語の舞台設定や登場人物の行動に大きな影響を与えるため、詳細に研究する意義は大きいと考える。児童文学は子ども向けの作品であるため、子どもが想像しやすい空間を提供することが重視される。このため、作者は身近な環境をモデルとして作品内の世界を創造する可能性が高い。したがって、児童文学における地理空間の特徴を解明し、それが作者の原風景とどのように関係しているのかを明らかにする研究は重要であると考えられる。

これまで、児童文学の文学地理学的研究では、寺本・井藤(1995)は、『赤毛のアン』と『ムーミン』を事例として、児童文学に描かれた架空空間と子どもの探

検行動に関する研究を行い、子どもの知覚空間の広がりやメンタルマップの形成を検討し、『赤毛のアン』と『ムーミン』の中に作られた架空空間は作者の「原風景」が反映され、裏側には作者の存在が見え隠れしているという結論を導出した。

また、中国では、姜（2013）は、『赤毛のアン』を研究対象として、物語に多く出てくる川、森、鳥などの自然的イメージを分析し、これらのイメージは物語の主人公のアンへの成長への影響を明らかにし、文学地理学的解釈を行った。中国では、文学の視点から文学地理的分析を行う方法が主流である。同じ『赤毛のアン』に関する研究でも、寺本・井藤は地理的視点を注目し、代わりに、姜の研究は文学的視点に着目し、文学イメージについて解釈をしたが、地理的な分析は欠如していると考えている。

文学地理学の研究には、文学的視点からのアプローチと地理学視点からのアプローチがあり、文学的視点からの研究は、前述の姜の論文のように、主に文学作品そのものを対象とし、テキストの中で描かれる場所や空間の意味を分析する。それに対して、地理学視点からの研究は、場所・空間を重視し、物語の舞台が現実の地理とどのように対応しているかを検証する。

文学作品における架空空間と作者の原風景との関係について論じると、これらの要素はしばしば緊密に結びついていることがわかる。作者は、自身の経験や記憶に基づく原風景を架空の空間として再構築し、それを物語の舞台として利用することが多い。特に児童文学作品においては、小人を登場人物とした作品が多く見受けられる。これらの作品には、架空空間と作者の原風景を取り入れたものが多く、子供たちにとって身近でありながらも新鮮な冒険の場を提供している。小人の視点から見ること、日常的な空間が巨大で未知の世界として描かれ、読者の想像力を刺激し、没入感のある読書体験を提供する。

「小人」、または「小さな人」は、文学作品、特に児童文学において頻繁に登場する要素である。小人の小さな身体は、部屋の隅々まで入り込むことができ、彼らの視点からは、現実のありふれたものが巨大に見え、人間にとって身近な空間が冒険の舞台となる。このような物語は、小柄な子供たちに想像力と没入感のある体験を提供し、日常生活空間の探索に対する熱意を喚起する可能性があると考えられる。

『小人の冒険』シリーズは、その独特な物語構造やキャラクターの描写により、多くの読者を魅了してきた。既存の研究では『小人の冒険』シリーズに関する文学地理的な分析はまだ少なく、このシリーズの持つ多層的なテーマや象徴性を探求する余地が大いにあ

る。

本研究の目的は、作者メアリー・ノートンによる児童文学作品を研究対象として、児童文学で表現される物語の舞台とその原風景となる著者の経験や身近な環境がどのように物語に反映されているかを検討し、文学地理学の視点から、児童文学における地理空間と作者の原風景との比較研究を行うことである。

小説の舞台を研究することは、物語の舞台設定や地理的背景の理解を助け、登場人物の行動や心理描写、物語の進行に対する理解を深めることができる。また、物語の舞台はしばしば作者の文化的背景や生活環境を反映している。これを研究することで、作品がどのような文化的・社会的背景に基づいているかを解明する手助けとなる。

また、物語の舞台が現実とファンタジーをどのように融合させているかを分析することで、作者の生活環境や経験が物語にどのように反映されているかを解明することができる。つまり、物語の舞台の特徴を明らかにすることによって、作者が物語の舞台をどのように創造し、その場所性にどのような意味を持たせようとしたのかを明らかにできる。さらに、この研究によって文学と環境の相互作用に関する新たな知見が得られる。このように、『小人の冒険』シリーズの舞台を文学地理学の視点から研究することは、児童文学の理解を深めるだけでなく、文学と地理空間の関係に関する学問的知見を広げる重要な意義を持っている。

2 研究対象と方法

本研究の対象は、1952年に出版された『床下の小人たち』（『The Borrowers』, 1952）から始まる『小人の冒険』のシリーズである。このシリーズは、イギリスの作家メアリー・ノートン（Mary Norton, 1903-1992）の最も著名なファンタジー小説である。その後の30年間にわたり、4つの続編が次々と発表された。2010年には、『床下の小人たち』を原作としたスタジオジブリ制作のアニメ映画『借りぐらしのアリエッティ』が上映された。この映画により、主人公のアリエッティはさらに人気を博し、「小人」の代表的なキャラクターとなった。

本研究は『床下の小人たち』を含む『小人の冒険』シリーズ全5作に関して、各物語において設定されている小説の舞台に関する地理空間の構成について検討する。さらに、現実のモデルとして考えられる場所と『小人の冒険』シリーズにおける地理空間との関連性、および作者メアリー・ノートンの子供時代の住居地に対する印象、いわば作者の原風景との関連性を検証す

る。研究方法として、文学作品中の地域や地域的描写を抽出し、その場所での登場人物の活動や場所の特徴を作者の原風景と照合して考察する。

メアリー・ノートンの小説に登場する主人公のアリエッティは、冒険心旺盛な小人の少女である。彼女の視点を通じて描かれるのは、危険に満ちつつも楽しさ溢れる冒険生活だけでなく、彼女が体験するさまざまな地理的空間やその風景である。

『小人の冒険』シリーズに関する日本での研究には、信岡(2013)による自然への憧れという視点からの『床下の小人たち』と『借りぐらしのアリエッティ』との違いについての比較研究がある。信岡によれば、自然に対する憧れの念は、原作においては物語の重要な鍵となる。一方、ジブリの映画版では、主人公が抱くこうした自然や外の世界に対する憧れはほとんど描かれず、ゆえに原作とはまったく異なる世界観が提示されている。このように信岡は自然への憧れを視点としたが、そこでの地理的分析はほとんどなされていない。

全5冊で構成させる『小人の冒険』シリーズは、発行順には、『床下の小人たち』(The Borrowers,1952),『野に出た小人たち』(The Borrowers Afield,1955),『川をくぐる小人たち』(The Borrowers Afloat,1959),『空をとぶ小人たち』(The Borrowers Aloft,1961),『小人たちの新しい家』(The Borrowers Avenged,1982)がある。

物語の主人公である小人は鉛筆ほどの大きさの人々であり、田舎の古い民家の片隅に住み、人間から食料や日用品を借りる借り暮らしをしている。人間のことは自分たちを養うための存在と見ているが、内心では怖れている。小人たちの家の名はその家の最寄りの家具からとられている。

第1作の『床下の小人たち』では、物語の主要な登場人物となるアリエッティが初めて世の読者の前に登場する。アリエッティの体型、性格、生活状況が詳細に描写され、さらにアリエッティが人間の男の子と友達になることから、アリエッティ一家の生活しているファーバンク邸の様子が描写されている。

第2作は、アリエッティたちの新しい家を探す旅の様子が描かれている。一家はファーバンク邸を離れ、いろいろな場所を訪れ、親族と新しい人間と小人の友達に出会い、読者も一緒に旅をしており、ファーバンク邸のまわりの田舎風景を感じることが得きる。しかし、穏やかな生活も束の間、彼らは新たな問題に直面することになる。

第3作では、アリエッティ一家は冒険の旅に出ることとなった。

第4作においては、アリエッティたちは人間に捕ら

われたが、最後には逃亡に成功する。

第5作では、一家は新たな家に定着したが、穏やかな生活に戻ることもあれば、新たな冒険を始めることもあるストーリーとなっている。

この『小人の冒険』シリーズはアリエッティ一家の旅物語であるが、旅の途中、彼らはいろいろな危険に遭遇し、何度も引越した。途中、野を越え、川に浮かび、空を飛ぶ。「小人」は人間と生活空間を同一にしながら、人間に姿を見られると引越しをするという設定があるので、小説の舞台が頻繁に変化する。それによって、読者である子どもたちに想像しやすいようにそれぞれの場面の舞台について詳細かつわかりやすく描写する必要がある。人間の想像が、現実の上に成り立っていることが多く、この過程で体験した風景は作家の原風景が再現されていると考えられる。

この小人の物語を創作したメアリー・ノートンは、イギリスの童話作家で、1921年までベッドフォードシャー州のレイトン・バザードにあるヒマラヤスギ荘と呼ばれるジョージアン様式の屋敷で育てられ、ここで少女期までを過ごしていた。メアリーの児童文学作家としての偉大さが認められたのは、『床下の小人たち』が1952年に出版され、カーネギー賞を受賞したことにある。その後の9年間に3冊の続編を書き、30年後の1982年にシリーズ最終作が出版された。

3 物語における地理空間と原風景

物語における地理空間の分析を行うため、第1作から第3作までの小説に登場する具体的な場所を表1にまとめた。表1に示すように、これらの作品の舞台はすべてイギリスのベッドフォードシャーに位置するレイトン・バザードである。

第1作『床下の小人たち』の主な舞台は、ファーバンク邸である。この邸宅はジョージアン様式の大きな家であり、主人公アリエッティ・クロックとその家族が最初に住んでいた場所である。アリエッティはここで人間の少年と出会い、友人関係を築くが、次第に使用人にその存在を察知され、家族は引越しを余儀なくされる。

第2作『野に出た小人たち』の主な舞台は、野原とトムの小屋である。ファーバンク邸の外の野原の風景を描きながら、クロック一家はファーバンク邸を離れ、広い野原を横断してトムの小屋にたどり着いた。トムの小屋で彼らは、少年トムや他の小人たちと出会い、短い期間ながら穏やかな生活を送る。

表1 『小人の冒険』シリーズの主な場所（岩波少年文庫062～066小人の冒険シリーズをもとに筆者作成）

場所	説明	行動	解説	類型	原風景
床下の小人たち					
ファーバンク邸	主人公クロッカー家の最初の家	小人一家はメイおぼさんの弟に見られて、友達になった	モデルは作者の子ども時代住んでいたベッドフォードシャー州のレイトン・バザードにある「ヒマラヤスギ荘」と呼ばれるジョージアン様式の屋敷と考えられる。	原風景を基づいて創作した空間 現実のモデルがある	ベッドフォードシャー州のレイトン・バザードにある「ヒマラヤスギ荘」と呼ばれるジョージアン様式の屋敷
野に出た小人たち					
レイトン・バザード	イギリスのいなかの町のなまえ、ベッドフォードシャーのところにある	1-3巻において主人公が行動した	1-3巻の物語の発生する場所。作者子ども時代生活した地域	現実のイギリスにある空間	レイトン・バザード
ファーバンク邸	クロッカー家の最初の家	家の使用人に鼠と認めて、逃げなければならなくなった	作者子ども時代の家の象徴物	原風景を基づいて創作した空間現実のモデルがある	ヒマラヤスギ荘
サクラ草の土手	ファーバンク邸外の風景	アリエッティの遊び場	イギリスの田舎風景	原風景を反映した空間	イギリスの田舎風景
トムの小屋	ファーバンク邸から離れた後一時的に住んでいた場所	人間のトムと小人のおじさん一家と小人スピラーと会った	一時的に安心できる避難所	架空の空間	なし
逃げた路線上のほかの場所	イボタのいけがきを通りめけた、果樹園、林、四つの野原、生垣、麦畑、ジブシーの箱馬車	主人公がファーバンク邸から逃げた際に通過する場所	ファーバンク邸のまわりにある風景の描写は、作者が生きていた時代に見た風景と考えられる。	原風景を反映した空間	なし
川をくだる小人たち					
下水の口	トムの小屋から川に行く経路。	トムが小屋から離れたことで、主人公は借りぐらしができなくなり、新しい家を探すために再び旅に出ることになる	川をつなぐルート	ストーリーを合理化するために存在する場所ではない	なし
川	新しい家探しの旅の路線。	主人公は川を流し、途中で危険に遭遇したこともある	レイトン・バザードからフォーダムへ移動できる川 グレート・ウーズ川	原風景を反映した空間	グレート・ウーズ川
空をとぶ小人たち					
フォーダム	45巻の舞台	45巻の行動	イギリスの町	現実のイギリスにある空間	フォーダム

児童文学における地理空間
—『小人の冒険』シリーズを事例に—

リトル・フォードダム	フォードダムにある小さな模型の村。	クロッカー家の新しい家。	いい人間ポットさんのもの。プラターさんとラターさんの模倣品との対比。	架空の空間	なし
バリホグギン	ウェント・ル・クレーにある模型の村。	なし	プラターさんはポットさんの模型の村の模倣品である。クロッカー家とほぼ関係がない。	架空の空間	なし
プラターさんの家	ウェント・ル・クレーに位置する。	小人たちはプラターさんに捕まれて、屋根の裏部屋に閉じ込められた。	屋根の裏部屋の窓から眺めて、フォードダムの村の風景が見える。	架空の空間	なし
空中の逃げた路線	屋根の裏部屋—プラターさんの庭—道—プラターさんが最近建てた別荘—牧場(牛)—サクランボの果樹園—教会、何軒かのちいさな家—丘、教会の庭—川—リトル・フォードダム	プラターさんの屋根の裏部屋からリトル・フォードダムへと逃げた行動	このルートは現実的な空間との対応が難しいが、このような詳細な景観の構築は純粋に想像だけで記述するのは難しいと思うので、ここでいう風景は実在の場所を取り込んだ架空の空間と思われる。	原風景を反映した空間	なし
小人の新しい家					
大きな家	クロッカー一家の(物語の中の)最後の家	引っ越しほかの小人と会う	フォードダムの教会の近くにある家	原風景を反映した空間	フォードダム

第3作の舞台は川である。この川はトムの小屋の下水路と繋がっており、アリエッティたちが二度目の引っ越しを行う際の経路となる。トムの小屋では「借りぐらし」を続けることができず、再び引っ越しを余儀なくされた一家は、物語の中で川沿いに新たな住処を探すことになる。

第4作と第5作では舞台がレイトン・バザードからフォードダムへと変更される。物語中に登場するフォードダムという村は、ケンブリッジシャーのフォードダムがモデルであると推測される。

第4作の主な舞台は二つの模型村である。一つはリトル・フォードダムと呼ばれ、ポット氏が所有する模型村であり、クロッカー一家の三番目の住居となる。ここでアリエッティはミス・メンチスとポット氏に見つかり、友好的な関係を築く。しかし、もう一つの模型村の所有者であるプラター氏は小人を金儲けの道具とみなし、クロッカー家を捕らえて自宅の屋根裏部屋に監禁する。冬が過ぎ、彼らは空を飛ぶ方法で屋根裏部屋

から逃げるが、リトル・フォードダムに戻ることはできず、やむを得ず三度目の引っ越しを開始する。

第5作では、小人たちは再び小川沿いに移動し、大きな町の教会近くにある大きな家に定住する。ここでアリエッティは新しい小人の友人を作り、教会で叔父一家と再会し、第4作で自身たちを監禁したプラター氏への復讐を果たす。以上が、クロッカー一家の物語における経歴と主要な舞台である。

この物語では、固定されたある地域の風景を舞台とするよりも、主人公の行動によって変化していく風景が舞台になっていると考えられる。例えば、第2作では、アリエッティたちの逃げた路線は、ファーバンク邸—ツツジの土手—イボタの生け垣を通りめけた—果樹園—表面の平な溶岩色の地面—林—牧場—野原—生垣—麦畑—ジブシーの箱馬車—トムの小屋の順である。

第2作だけでなく、第3作も、川の流れとともに、川の周りの風景を映し出す。

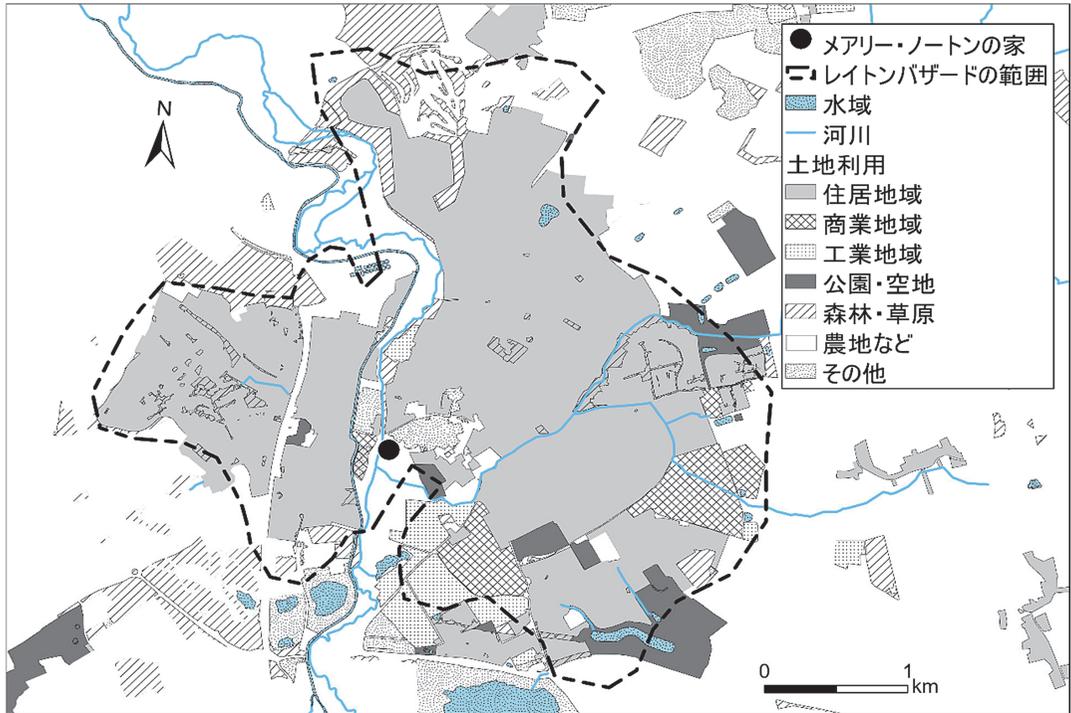


図1 レイトン・バザードの土地利用

(Google mapをもとに作成 www.google.co.jp/maps/place/%E8%8B%B1%E5%9B%BD%E8%8E%B1%E9%A1%BF%E5%B7%B4%E6%B3%BD%E5%BE%B7/@51.9208331,-0.6835491,14z/data=!3m1!4m6!3m5!1s0x48764e08c08bc8a9:0xb6dd641c95115264!8m2!3d51.9196839!4d-0.6606571!6zL20vMDIwM24z?entry=tту&g_ep=EgoyMDI0MDkwOS4wIKXMDSoASAFQAw%3D%3D 2024.8.15閲覧)

第4作では、空を飛ぶというテーマに対応して主人公たちが空中に逃げた路線は、屋根の裏部屋—プラターさんの庭—道—プラターさんが最近建てた別荘—牧場(牛)—サクランボの果樹園—教会、何軒かのちいさな家—丘、教会の庭—川—リトル・フォードである。

これらの地理空間の記述と構成は、著者の体験と関連しているかについて考察するのであれば、原風景という概念に触れなければならない。原風景は、幼少年期の体験から生じるイメージのうち、風景の形をとっているものと定義されている。文学における原風景の研究において、最も注目されたのは奥野(1972)の研究である。奥野は、原風景が文学の母胎と指摘した。原風景について、奥野(1972)によれば、形成の時期が二つある。一つ目は作家の幼少年期と思春期である。その時期は、生まれてから七、八歳ころまでの遊び場や生活環境によって無意識のうちに形成され、深層意識の中に固着する。二つ目は二十歳前後の人格形成期である。この時期に受ける原体験や感銘によって原風景は形成される。

また、中津・古谷(2003)は、原風景形成の幼少年期と人格形成期の間にある中間期との連続性を検討した。その結論によれば、従来指摘があった原風景形成の二つの時期の間には、それらと違った風景体験の傾向を持つ中間期が認められ、人間は連続的な風景体験があることを明らかにした。

作者メアリー・ノートンの原風景を検討するには、彼女のライフストーリーを理解する必要がある。彼女は1921年の18歳までベッドフォードシャー州のレイトン・バザードに住んでいた。この時期は奥野が述べた原風景形成の二つの時期に含まれる。ベッドフォードシャーはメアリーにとって重要な場所であることから、物語の舞台としてよく利用されたと考えられる。また、メアリーのイギリス—アメリカ—イギリスと引越した経歴も原風景の形式で記憶の中に残され、物語によく見られる場所の変動に影響を与えている可能性が高いと思われる¹⁾。

そこで、小説に記述されている舞台のモデルとなったと考えられる現実の空間について次に分析する。最初に、第1作から第3作までの舞台となっているベッ

ドフォードシャーについて検討する。ベッドフォードシャーはイングランド東部にあるカウンティで、ケンブリッジシャーなどの州に接している（図1）。ベッドフォードシャーの地形について、南部は、南西—北東方向にチルトーン丘陵が走る。北部の低地は肥沃な農業地帯で、農地は全面積の半分に達する。その他の地域は、グレートウーズ川とその支流の流れ出る広大な流域になっている。

第1作の舞台となるリエットたちの最初の家であるファーバンク邸のモデルは、レイトン・バザードにあるヒマラヤスギ荘と認められる。レイトン・バザードは、ベッドフォードシャーのマーケットタウンである。「ヒマラヤスギ荘」はメアリー・ノートンの1921年までに住んでいた場所であり、今はレイトン中学校となっている。ヒマラヤスギ荘はジョージアン様式の建物で、第1作『床下の小人たち』の舞台とするファーバンク邸もジョージアン様式で、第2巻にその屋敷は中学校になったという描写があるので、ヒマラヤスギ荘はファーバンク邸の原型と伝えられている。

第4作、第5作の舞台と推測されるフォードダムはイングランドのケンブリッジシャーの田舎にある村である。

レイトン・バザードとフォードダムはグレート・ウーズ川の流域に位置する。グレート・ウーズ川はイングランドにある川で、イギリスで4番目に長い川で、支流もいくつかある。支流に含む流域の中にはベッドフォードシャーのレイトン・バザードとケンブリッジシャーのフォードダムが含まれる。

川に沿ってレイトン・バザードからフォードダムに到着する可能性があることから、そのような地理的位置関係から小人たちの川に沿って引越した描写のモデルではないかと考えられる。

Gordon Campbell (2010) の記事によると、メアリーが『小人の冒険』を書くきっかけとなったのは、彼女が子供の頃、強い近視だったからである。兄たちのように空を見上げて鳥を観察する代わりに、生垣や土手や水たまりを見つめ、そこに住む生き物と同じくらい小さくなったらどんな感じだろうと想像していたのである。水たまりやアザミ、小鳥など、私たち人間にとってごく普通のありふれたものが、ヒキガエルのような小さな生き物にとって、大きな障害や脅威となることに気付いたのである²⁾。

以上のように、『小人の冒険』シリーズの地理空間は、作者メアリー・ノートンの想像力（仮想空間）と現実に存在する場所（メアリー・ノートンが経験した現実空間＝原風景）を組み合わせて構築されたものと考えられる。その想像力と現実に存在する場所を組み合わせ

せは、作者であるメアリー・ノートンが経験した原風景の影響を受けたものと考えられる。

4 おわりに

本論文では、イギリスの児童文学作品『小人の冒険』シリーズにおける舞台の記述を分析することにより、小説に記述された地理空間と作家メアリー・ノートンの原風景との関連性を検討した結果、以下のことが明らかになった。第一に、『小人の冒険』シリーズにおいて、第3作までの地理空間のモデルはイギリスのレイトン・バザードであったが、第4作と第5作の主な舞台はレイトン・バザードから、フォードダムに変更されている。このことから、小説の舞台として表現される地理空間は、作者が経験した現実の世界がモデルとなっているといえる。第二に、作者のメアリーの原風景と物語の架空空間との関係が深いことが認められる。すなわち、小説の舞台となったレイトン・バザードやフォードダムなどに関する作者の意識は作者自身が経験した身の回りの風景を用いて、物語の架空空間を創造したと考えられる。

本稿は、『小人の冒険』シリーズにおける地理的空間の場所的特徴についての解説と考察を試みたが、各小節の舞台となった具体的な場所については、ピンポイントでの指摘はできなかった。しかしながら、『小人の冒険』シリーズにおいて記述された小説の舞台は、著者のメアリー・ノートンの生活経験のある場所を用いて小説の舞台を設定したと推測できた。

【注】

- 1) www.britannica.com/biography/Mary-Norton (2024.8.15閲覧)
- 2) Gordon Campbell (2010) Small people with big problems werewolf.co.nz/2010/02/classics-the-borrowers-1952-by-mary-norton/ (2023.2.25閲覧)

【参考文献】

- 奥野健男 (1972) 『文学における原風景』集英社。
寺本潔・井藤かおり「児童文学に描かれた架空空間と子どもの探検行動—『赤毛のアン』及び『ムーミン』を事例に」杉浦芳夫編 (1995) 『文学 人 地域—越境する地理学』古今書院 pp. 261-312
中津好徳・古谷勝則・油井正昭・赤坂信・多田充 (2003) 「若者に記憶された風景と成長段階に関する研究」千葉大園学報 第57号 pp.45-57

信岡朝子(2013)「メアリー・ノートン『床下の小人たち』シリーズに見る自然への憧憬—ジブリ映画『借りぐらしのアリエッティ』との比較から—」東洋大学人間科学総合研究所紀要 第15号 pp.71-84
メアリー・ノートン著 林容吉訳 (1956):『床下の小人たち』岩波少年文庫062
メアリー・ノートン著 林容吉訳(1976):『野に出た小人たち』岩波少年文庫063 1976年第1刷発行
メアリー・ノートン著 林容吉訳(1976):『川をくだ

る小人たち』岩波少年文庫064
メアリー・ノートン著 林容吉訳(1977):『空をとぶ小人たち』岩波少年文庫065
メアリー・ノートン著 猪熊葉子訳(1990):『小人たちの新しい家』岩波少年文庫066
姜淼(2013) **在自然的意象中构建成长《绿山墙的安妮》的文学地理学解读 理论观察** No. 9 2013 Serial No. 87[Y1], pp. 96-97

(主指導教員 由井義通)